

青森県埋蔵文化財調査報告書第85集

白山平(2)遺跡
発掘調査報告書

昭和58年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第85集

白山平(2)遺跡
発掘調査報告書

昭和58年度

青森県教育委員会

序

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴い、路線内に所在する白平山(2)遺跡の記録保存のため、発掘調査を実施し、その結果をまとめたものでありますが、この成果が、今後の埋蔵文化財の保護と研究にいささかでも役立てば幸いと思います。

ここに、調査の実施及び本報告書の作成に当たって、種々御指導、御協力をいただいた調査員をはじめ、関係各位に厚くお礼を申し上げます。

昭和59年3月

青森県教育委員会

教育長 二ッ森 重 志

例 言

- 1 本報告書は、昭和56・57年度に実施した八戸市大字根城に所在する白山平⁽²⁾遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 執筆者の氏名はそれぞれの文末の（ ）内に記した。
- 3 挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。写真の縮尺は任意である。
溝状ピット 1/60 土壌 1/50 溝 1/60 建物跡その他 1/50
土器実測図 1/3 土器拓影図 1/2.5
剥片石器 1/2 礫石器 1/3 古銭 1/2
- 4 石質鑑定は、八戸高等学校松山力教諭に依頼した。
- 5 調査区の設定は、日本道路公団仙台建設局が工事に設置した中心杭を結ぶ直線を基本として行った。また、発掘調査でベンチマークを設定した際も、中心杭の標高をもとにした。
- 6 地形図（調査区域内）は、日本道路公団仙台建設局提供の地形図（2000分の1）をもとにした。

目 次

序 文	
例 言	
第1章 調査に至る経過と調査要項	2
第1節 調査に至る経過	2
第2節 調査要項	2
第2章 遺跡の概観	6
第1節 遺跡の立地	6
第2節 周辺の遺跡	14
第3章 調査の方法と経過	16
第1節 調査方法	16
第2節 調査の経過	17
第4章 検出遺構と出土遺物	20
第1節 遺構	20
(1) 溝状ピット	20
(2) 土壇	26
(3) 建物跡	29
(4) 溝・環状溝	29
第2節 遺物	32
(1) 土器	32
(2) 石器	33
(3) 古銭	34
第5章 まとめ	42

挿 図 目 次

第1図	東北縦貫自動車道八戸線建設予定路線内 遺跡位置図……………	1
第2図	第2-a図 遺跡周辺の地形分類図…	7
	第2-b図 地質分布図……………	9
第3図	発掘区域地形図及びグリッド配置図…	13
第4図	周辺の遺跡……………	15
第5図	遺構配置図……………	19
第6図	第1号溝状ピット……………	20
第7図	第2号溝状ピット……………	21
第8図	第3号溝状ピット……………	22
第9図	第4号溝状ピット……………	23
第10図	第5号溝状ピット……………	23
第11図	第6号溝状ピット……………	24
第12図	第7号溝状ピット……………	25
第13図	第8号溝状ピット……………	26
第14図	第1号土壇……………	27
第15図	第2号土壇……………	27
第16図	第3号土壇……………	28
第17図	第4号土壇……………	29
第18図	建物跡……………	30
第19図	環状溝……………	31
第20図	溝跡……………	31
第21図	出土遺物①……………	36
第22図	出土遺物②……………	37
第23図	出土遺物③……………	38
第24図	出土遺物④……………	39
第25図	出土遺物⑤……………	40
第26図	出土遺物⑥……………	41

図 版 目 次

第1図版	発掘区域近景、遺物出土状況 遺跡の層序……………	43
第2図版	溝状ピット完掘……………	44
第3図版	溝状ピット断面及び土壇……………	45
第4図版	土壇、その他の遺構、土器出土状況…	46
第5図版	出土遺物①……………	47
第6図版	出土遺物②……………	48
第7図版	出土遺物③……………	49

表 目 次

第1-a表	地質層序表……………	8
第1-b表	八戸火山灰層序表……………	10
第1-c表	黒色土層序表……………	10
第1-d表	十和田火山完新世火山灰編年表…	10
第2表	周辺の遺跡一覧表……………	14
第3表	土器観察表……………	34
第4表	石器計測表……………	35



第1圖 東北縦貫自動車道八戸線建設予定路線内通跡位置圖

第1章 調査に至る経過と調査要項

第1節 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線建設予定路線は、昭和45年6月に基本計画が策定され、昭和52年9月に実施計画の認可並びに青森県と岩手県内の路線ルートが同時に発表された。総延長649.4kmのうち、県内ルート分は14.28kmである。青森県教育委員会では、日本道路公団の依頼により昭和53年4月と11月の2度にわたって、県内建設予定路線内（三戸郡南郷村、福地村、八戸市）の遺跡分布調査を実施したところ、周知の遺跡（右エ門次郎窪、葦窪）以外に12か所の遺跡と思われる箇所が認められた（161,230㎡）。その後、今後の調査等について両者が協議し、周知の遺跡の12か所は試掘調査を行って埋蔵文化財包蔵地(遺跡)か否かを決定することとなった。県教育委員会では、昭和54年9月～10月の2か月にわたり、12か所の試掘対象遺跡のうち6か所について試掘調査を実施した結果、2か所（No.1、10）が除外され、最終的には12か所が発掘調査対象遺跡となった。また、これらの遺跡は、番号で呼称していたが、小字名からとった遺跡名に変更した。

昭和54年10月、日本道路公団仙台建設局から、5遺跡の発掘調査の依頼があり、翌昭和55年4月からその遺跡の発掘調査を実施した。引き続き、本遺跡をはじめ、鴨平(1)、鴨平(2)、昼巻沢、長者森の5遺跡について発掘調査の依頼があり、翌昭和56年度4月から調査を実施した。なお、本遺跡の調査予定総面積は19,000㎡で、このうち昭和56年度（第1次調査）には14,000㎡の調査を実施し昭和57年度（第2次調査）には残りの5,000㎡を調査することになった。

第2節 調査要項

1. 第1次調査要項

(1) 調査目的

東北縦貫自動車道八戸線建設工事に先立ち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。

(2) 調査予定期間

昭和56年4月20日から同年10月31日まで

(3) 道路名及び所在地

白山平②遺跡 八戸市大字根城字白山平38外

(4) 発掘調査予定面積

12,000㎡

(5) 発掘調査依頼者

日本道路公団仙台建設局

(6) 調査受託者

青森県教育委員会

(7) 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

(8) 調査協力期間

八戸市教育委員会

(9) 調査参加者

調査指導員	村 越 潔	弘前大学教授 青森県文化財保護審査議会委員 青森県文化財保護審査議会委員
"	小井田 幸 哉	青森県文化財保護審査議会委員
調査協力員	吉 田 月二郎	(前・八戸市教育委員会教育長)
"	岩 谷 喜代美	八戸市教育委員会教育長
調 査 員	松 山 力	県立八戸高等学校教諭
"	滝 沢 幸 長	私立光星学院高等学校教諭 (現・光星学院開発局職員)
"	橋 本 正 信	県立三戸高等学校教諭 (現・県立八戸南高等学校教諭)
"	山 口 義 伸	県立木造高等学校稲垣分校教諭
"	中 田 隆 也	八戸市立湊中学校教諭 (現・八戸市立根城中学校教諭)
調査補助員	高 坂 一 夫	
"	須 藤 徹 彦	
"	佐 藤 隆 司	
"	竹 内 葉 子	
"	駒 場 容 子	
青森県埋蔵文化財調査センター		
所長	北 山 峰一郎	(現・県立郷土館副館長)
	工 藤 泰 典	
次長	古 井 睦 夫	
調査第二課長	山 田 洋 一	

主査 遠藤 正夫
臨時職員 飛内 勉 (昭和57年3月25日退職)

2. 第2次調査要項

(1) 調査予定期間

昭和57年4月15日から同年6月15日まで

(2) 遺跡名及び所在地

白山平(2)遺跡 八戸市根城字白山平38外

(3) 発掘調査予定面積

5,000㎡

(4) 発掘調査依頼者

日本道路公団仙台建設局

(5) 調査受託者

青森県教育委員会

(6) 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

(7) 調査協力機関

八戸市教育委員会

(8) 調査参加者

調査指導員	村越 潔	弘前大学教授 青森県文化財保護審議会委員
"	小井田 幸哉	青森県文化財保護審議会委員
調査協力員	岩谷 喜代美	八戸市教育委員会教育長
調査員	三辻 利一	奈良教育大学教授
"	木村 克彦	八戸市工業大学工学部講師 (現・八戸市工業大学工学部助教授)
"	松山 力	県立八戸高等学校教諭
"	滝沢 幸長	私立光星学院高等学校教諭 (現・光星学院開発局職員)
"	橋本 正信	県立三戸高等学校教諭 (現・県立八戸南高等学校教諭)
"	中田 隆也	八戸市湊中学校教諭 (現・八戸市立根城中学校教諭)

青森県埋蔵文化財調査センター

所長	工藤泰典
次長	古井睦夫
総務課長	森内四郎
調査第二課長	山田洋一
# 主任主査	成田誠治
# 主事	岡田康博
調査補助員	三上等
#	花田比呂志
#	小田川哲彦
#	矢田真輝子
#	島田ひろみ

第2章 遺跡の概観

第1節 遺跡周辺の地形と地質について

(1) 遺跡周辺地域の地形

東北自動車道八戸線の予定路線及び関連開発予定地のうち、八戸市内には、ほぼ南北方向およそ7.5km区間に、南から鴨平(1)、鴨平(2)、昼巻沢、葦窪、長者森、白山平(2)、牛ヶ沢(3)、鶴窪などの各遺跡が連なっている。

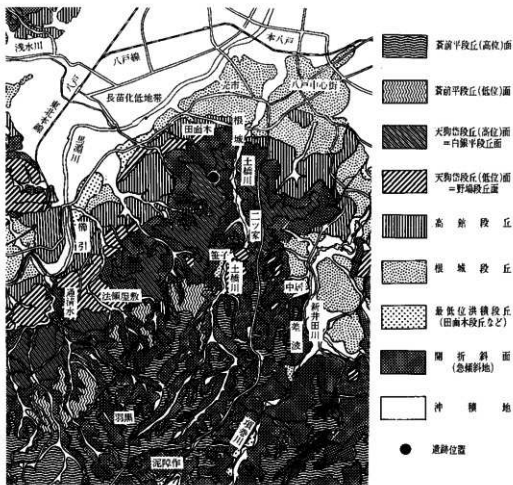
青森県南東部のうち、馬淵川～名久井岳東麓～岩手県境～階上岳西麓から北麓～太平洋岸に囲まれた、南西約25km、南北約20kmの地域は、川沿いや海岸沿いの平坦面がよく残された中・低位の段丘、それより高くゆるやかに起伏する丘陵地(高位段丘)、河川の谷壁などの急傾斜や急崖、および海岸や河谷底の低平な沖積地で構成されている。

この地域は、岩手県軽米町を通りぬけ、北々東方の八戸湾に流れ下る新井田川によって2分されている。名久井岳東麓線～馬淵川と新井田川にはさまれた地域は、岩手県北の折爪岳山塊北部東側山麓から、北々東の八戸線に向って、紡錘状にはりだす丘陵・段丘群となっている。その主体は、高さ140～300mの蒼前平段丘高位面が開析された丘陵地で、おもにその北側から北西側に、順次により高度の低い丘陵・段丘群が続いている。

この地域の北半部の南東側には、地域南半部の南郷村鳩田付近に源を発し北東方へ下り八戸市是川の差波で新井田川に合流する頃巻川があって、丘陵地を削りこみ、特に下流部では高さ(丘陵面と谷底部の標高差)最大100m余りの急斜面(谷壁)をつくっている。頃巻川中流域にあたる南郷村泥障作の北西方、南郷村・福地村・八戸市相互の行政区界の交差する付近からは、地域北半部を縦断するように土橋川が流れ、八戸市の売市地区西縁に達している。

土橋川は、八戸市二ツ家付近までは、頃巻川とそれに続く新井田川の西を、ほぼ2kmの距離で平行するように北々東へ流れ、一端北々西方へ向きをかえたあと再びゆるく湾曲して北々東へ向っている。両側の丘陵・段丘面の縁辺部と谷底の沖積面との間は、高さ(標高差)最大60m余りの急斜面(谷壁)となっている。

土橋川最上流谷頭付近(鴨平(1)・(2)遺跡付近)は、標高200m前後のゆるやかに起伏する丘陵面となっており、ここからやや東よりに北方へ、次第に高度を低くしながら細長くのびる丘陵・段丘面の背部(稜線に沿う面)は、土橋川と西方を流れる馬淵川の水系の分水嶺に相当している。この背部の中心線(分水界)と土橋川の間は1km以内の幅である。一方、土橋川最上流の谷頭のすぐ西に谷頭をもち、北々西へ下って、通清水の西で馬淵川に注ぐ谷と馬淵川を西縁とし、背部中心線と東縁とする地域は、北西方へ向って低くなり、その間をいくつもの小河川が



第2-a図 遺跡周辺の地形分類図

刻んでいる。これらの小河川は、いずれもおしなべてみれば北西へ下り、馬淵川の合するもので、土橋川と馬淵川の間には北々東方へ突き出す丘陵・段丘群の幅は、鴨平と通清水の間で4km以上であるが、北方に狭くなり、八戸市根城・売市地区で1.5kmから1kmとなる。

この地域の丘陵・段丘群は、上位から蒼前平段丘・天狗岱段丘・高館段丘・根城段丘・田舎木段丘に区分でき、そのうち蒼前平段丘・天狗岱段丘は、さらにそれぞれ上位・下位の2段に区分できる。第2-a図は鴨平付近以北の地形区分図である。

蒼前平段丘は、新井田川より東方の八戸平原地域では広い平坦面が残されているが、この地域では平坦面に乏しく、ほとんどが開折されて、起伏に富んだ丘陵地となっている。第2-a図では、急斜面部を開折地として、相対的に傾斜のゆるい起伏地から平坦地までを段丘面(丘陵面)としてある。蒼前平段丘は、丘陵地背面(緩斜面の丘陵面)の高さが140~300mの高位面と、高さ100~120m以上の低位面に区別される。

天狗岱段丘は、八戸市城北部の天狗岱付近に広い平坦面をもつ段丘であるが、この地域では着前平段丘同様、かなり開析がすすんでおり平坦面に乏しいが、二ツ家付近と根城地区の南方の地域（笹子付近まで）及び通清水・法領屋敷とその北東の地域にやや広い平坦面がある。このうち、二ツ家付近と根城の南方の地域及び法領屋敷の北東の地域では平坦面高度85～110m余りて天狗岱段丘高位面に相当し、それより低い60m以上の部分が低位面に相当する。第2-a図では、天狗平段丘相当のうち、比較的急斜面になっているところは開析地としてある。

高館段丘は、この地域では標高30m以上で、比較的平坦面がよく残されているところが多い。第2-b図では、段丘崖や開析された斜面も含めて分布を示してある。

根城段丘は標高15m以上（一部15m未満）の、平坦面のよく残された段丘である。田面木段丘は、洪積段丘中最下位の段丘で、平坦面の傾斜がやや大きい。

土橋川谷頭部付近の鴨平(1)・(2)遺跡を除けば、各遺跡はいずれも、土橋川の西に沿う丘陵背面（尾根に相当する稜線に沿う面）上や、それを西～北方から削りこむ谷の谷頭部にある。

白山平遺跡は、この地域の北部に広がる天狗岱段丘高位面（海拔90～120m）上、著名な史跡「根城跡」のほぼ南方約2kmの地点にある。この地域の天狗岱段丘高位面はかなり平坦で、遺跡の南方約1.5km付近の笹子のすぐ面から、西北西方と北方へ分岐してのび、北方へ続く平坦面はさらに遺跡のすぐ北で西北西方と北々東方へ分岐する。遺跡の東方約700mには、土橋川が狭い谷底沖積地をつくって北流し、両側に標高差50m程度の急傾斜の谷壁を刻んで、さらに東方を南北にのびる天狗岱段丘を切り離している。遺跡の南縁には、南側の段丘面を分けてほぼ西方へ下る谷の谷頭の一つがあって、この谷頭斜面から谷底にかけては隣接する長者森遺跡がある。ほぼ西方へ下る谷は遺跡の南西方600mまでに、段丘面を刻むいくつかの小谷を集めて西北

西へ下り、遺跡の西方1.5kmの高館段丘の平坦面上に建つ八戸工業高等専門学校の南を西に抜け、笹子の西方から北西に天る谷と合流して、馬淵川を北西方へ押しやるように開きながら突きだす扇状地性の沖積地を形成している。遺跡付近から北々西に向かう平坦面は幅300～200mで、800mほどのび、その突端の斜面部には牛ヶ沢遺跡がある。この突

地質年代	層	序	
第四紀	一宮小牧火山灰層一	沖積低地—泥・砂・礫など 台地部 { 黒色土層 火山灰層 (浮石群)	
	一十和田a降下火山灰層一		
	一十和田b降下火山灰層一		
	一中根浮石層一		
	一南部浮石層一		
	一二ノ倉火山灰層一		
	八戸火山灰層	火山灰層・浮石層	
	(田面木段丘)		
	高館火山灰層	粘土質褐色火山灰層(ローム)・浮石層	
	洪積世	根城段丘堆積物	河成礫
	高館段丘堆積物	シルト・砂・砂礫	
	天狗岱火山灰層	粘土質褐色火山灰層(ローム)・浮石層	
	天狗岱段丘堆積物	砂鉄質砂・砂礫	
第三紀	中新世	牛川層相当層	泥岩・砂岩・凝灰岩、(軟体動物化石)
	中新世	名久井赤安山砂礫相当層	火山砕岩(含赤粘板岩)・頁岩

第1-a表 地質層序表

端部から遺跡までの平坦面の西側は幅400～300mの比較急な斜面となり、その西方に高館段丘面が広がっている。

(2) 地質と概略

新井田川と、馬淵川下流とにはさまれた地域の地質層序は第1-a表のとおりである。そのうち白平②遺跡を中心

とした地域の地質分布を第2-b図に示した。

遺跡周辺の基盤は、おもに第3紀中新世の安山岩や火山砕屑物で、ところによってその上に鮮新世の地層とみられる礫岩・砂岩・泥岩を主とする地層がのっている。

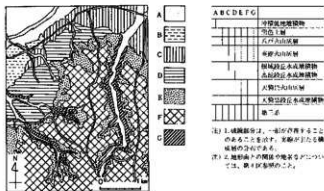
これらの基盤岩類を覆って、洪積世の段丘堆積物や褐色火山灰（ローム）層と、黒色土層にはさまれて沖積世の火山砕屑物が分布するほか、河谷底には軟弱な沖積世が存在する。沖積世の段丘堆積物は、ふつう数m程度の厚さの砂礫層で、チャートや安山岩礫を多く含んでいる。

褐色火山灰層は、下から天狗岱・高館・八戸火山灰層の3層に分けられる。天狗岱火山灰層は、厚さ数m以内の、しまって固い暗褐色に粘土質火山灰を主としている。高館火山灰層は、明るい色調の粘土質褐色火山灰を主とし、数枚以上のそれぞれに特徴のある厚さ数10mの粘土質浮石層をはさみ、全体層厚は5～8mである。

八戸火山灰層は、灰白色～明黄褐色の砂質火山灰層と浮石層の互層、及びその上の明褐色火山灰層で構成される。互層部は下からI～VIの6層に区分されるが、それぞれの特徴と層厚は第2表に示した通りである。上部の明褐色火山灰層までを含めた厚さは、遺跡周辺で1.5m前後である。上限はふつう黒色土層に漸移するが、ごく一部の地域で、明褐色火山灰層の上に橙褐色火山灰層が数10cm以内厚さでのとところがあり、本遺跡でも、谷底部に近い部分で観察された。二ノ倉火山灰層に相当するものと思われる。

地表直下の黒色土類中には、下から南部浮石層・中散浮石層・十和田b降下火山灰層・十和田a降下火山灰層・苫小牧火山灰層など、少なくとも5枚の火山砕屑物層がはさまれる。

南部浮石層は、粒径0.3～2cm程度の黄橙色～明褐色～赤褐色の浮石が密集した、末膠結でくずれやすい。粗粒砂大の火山岩片のまじる浮石層であるが、懸巻沢遺跡よりも北方の地域では分布しない。中散浮石層は、おもに砂粒大の黄色浮石が末膠結状態で密集した浮石層であるが、本地域では、ところどころで厚さ10～30cmの連続した地層となっているほかは、厚さ5～20cmの浮石密集塊として断続するところもあるが、多くの場所では黒色土と混合した土層となり年



第2-b図 地質分布図

層	厚	備考
Ⅵ 褐色火山灰	20~30	上部黑色土へ漸移
Ⅴ 浮石	10~30	粒径0.5~2cm程度の浮石
Ⅳ 粘土質砂質火山灰	20~40	よくしまる
Ⅲ 浮石	20~40	粒径0.5~5cm程度の固い浮石
Ⅱ 砂質火山灰	4~8	よくしまる
Ⅰ 浮石	3~4	粒径0.5~5cm程度の固い浮石
Ⅰ 粘土質砂質火山灰	30~40	中堅に浮石層、その他軟弱の浮石層

第1-b表 八戸火山灰層序表

年代	記号	土層	火山噴出物	備考
歴史時代	I	灰褐色土層		降下土、その他の表土
	II	灰黒色土層	十和田a火山灰層	固い白色浮石が散らばる。
			十和田b火山灰層	
縄文時代後期	III	暗褐色土層		黒色土層の下半は中部浮石への漸移部で暗黄褐色。
	縄文時代前期	IV	粘土質黒褐色土層	中雑浮石層
粘土質暗褐色土層			八戸火山灰層	南部浮石の直上に浮石がちらばる。
粘土質浮石質暗褐色土層			南部浮石層	
粘土質砂質褐色土層			ノ倉火山灰層	
中世山石器時代	V	褐色火山灰層	八戸火山灰層	
		泥・砂・礫層	高尾火山灰層	
		基盤岩の風化土層	天狗岩火山灰層	

第1-c表 黒色土層序表

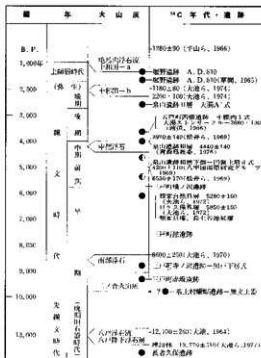
代の大まかな指標とはなっても、厳密な年代指標層とはなり得ない。

十和田b降下火山灰層は、噴出源の十和田湖の東側20km以内では、下半が白色浮石、上半が青灰色砂質火山灰の2層で構成されるが、その外側の地域では白色浮石部のみが分布する。本地域では、粒径0.2~0.6(最大2)cmの固い白色浮石の集まる1~5cmの厚さの浮石層が局部的にみられるにすぎず、一般にはその浮石が黒色土中に散在する状態のところが多い。

十和田a降下火山灰層は、灰白色~淡灰黄色のシルト状細粒火山灰層であるが、本地域では歴史時代奈良・平安期の遺構や小谷跡あとのような当時の凹地の覆土中に、レンズ状の形態で垂れさがる最大層厚数cmの薄層として、ところどころにみられるにすぎないが、鶉窪遺跡ではその上位の苦小牧火山灰層とともに最大層厚が20cm程度の例がみられた。

以上の、黒色土層中に含まれる沖積世火山碎屑物層及び八戸火山灰層の降下年代については、第1表を参照されたい。そのうち、中雑浮石の降下年代については、岩手県で縄文時代前期ではないかとの疑問が出されていたところ、十和田市明戸遺跡で遺構・遺物との関係から、縄文時代前期後半にさかのぼることが確実となった。

近年になって、十和田a降下火山灰層より数10~200年後の間の降下と考えられる苦小



第1-d表 十和田火山全新世火山灰層年表

牧火山灰層ともう一つの降下火山灰層の存在が、町田洋氏らの研究と三述利一氏の蛍光X線分析の資料から明らかにされ、本地域でも、鶉産遺跡や根城をはじめ、いくつかの遺跡でその存在が確認されている。

③ 遺跡の層序

遺跡は平坦面上にあるため、遺跡の土層は変化が少なくほぼ安定している。大別して上から黒色土層類とそれにはさまれる火山噴出物（浮石層や火山灰層）、八戸火山灰層、高館火山灰層の3群であるが、発掘にあたってはもっと細かく上から下へ、第Ⅰ層から第Ⅷ層までの13層に区分された。

第Ⅰ層は黒褐色～暗褐色の表土層で、植物の根毛を多量に含み、人工的あるいは人為的な混合物が含まれるが、耕作によって攪乱され均質になっている場所が多い。層厚は10cm程度のところが普通である。

第Ⅱ層は黒褐色で第Ⅰ層よりはしまっているが第Ⅰ層とともに粘性が乏しい。乾燥しやすく乾燥すれば灰黒色を帯びる。ところどころに数mm程度の固い白色浮石が混じっている。層厚は10～20cm程度であるが、第Ⅰ層との境界がうねっているため、第Ⅰ層との合計層厚は10～30cmである。また、第Ⅰ層と区別できない部分があり、そのようなところでは薄くなる。

第Ⅲ層は黒褐色～暗褐色土層であるが下方にむけて黄色がかり相対的に淡い色調へ変化する。砂粒大の黄色の中散浮石粒を下方ほど密に含んでいるため、ところどころに塊状で黄色の浮石粒密集部が存在する。下部ほど浮石粒を含むため粘性に乏しく砂質となっている。この部分の厚さは10～30cmで、上位層との合計層厚は30～40cm程度である。

第Ⅳ層はやや暗い褐色土層で、粒径0.5～1cmの灰白色あるいは黄褐色～黄橙色の粘土化した浮石が散らばって含まれている。上位の第Ⅲ層との境界は比較的明瞭で、厚さは15～45cmと変化する。中散浮石降下以前に形成された土層である。

第Ⅴ層は黄褐色土層で、南部浮石層を構成する浮石によく似た、粒径0.2～1.5cmの黄褐色浮石がところによりまばらに、ところによりやや密に含まれる。粘土質で粘性にやや富み、層厚は20～60cmである。また、地表から第Ⅴ層までの合計層厚は50～100cmが普通である。

第Ⅵ層は明黄褐色～明褐色土層で、南方の地域に明瞭に分布する南部浮石層を構成する浮石に相当すると思われる、粒径0.2～3cmの黄褐色浮石が多量に混じっていて、南部浮石分布域の周縁相を示していると考えてよい火山灰質の土層である。層厚は普通20～40cmであるが、ところどころで下位のⅦ層あるいはⅧ層の上部にくいこみ、70cm以上に達しているところがある。

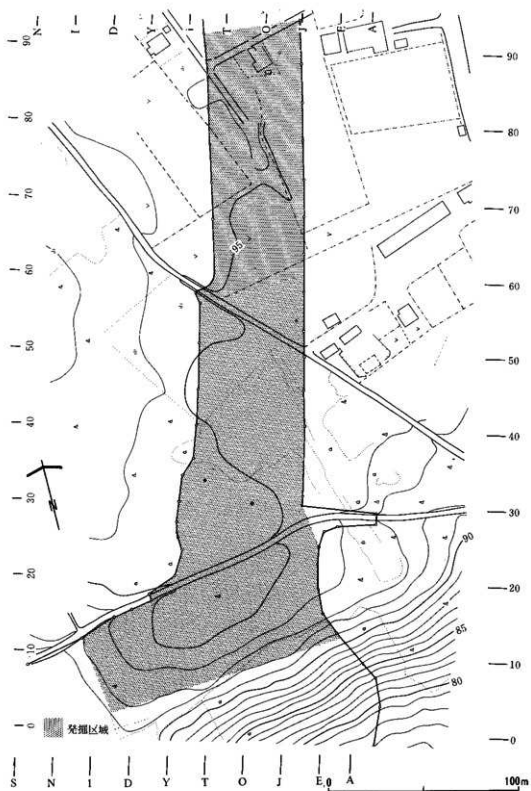
第Ⅶ層は明黄褐色～浅黄褐色の粘土質火山灰層（ローム層）で八戸火山灰層の上部に相当し層厚は20～30cmである。

第Ⅷ層、第Ⅸ層、第Ⅹ層、第Ⅺ層、第Ⅻ層は八戸火山灰層の下部にあたり、砂質～粘土質の

細粒火山灰ともろくくずれやすい浮石の互層よりなり、各層はそれぞれ大池ら(1970)のⅤ層、Ⅳ層、Ⅲ層、Ⅱ層、Ⅰ層に相当するが、地質の項を参照されたい。第Ⅷ層から第Ⅻ層までの合計層厚はおよそ100～120cmである。これらの色調は、新鮮で風化のすすんでいない部分ではおおむね灰白色であるが、多くの場所で淡黄色～明黄褐色～黄褐色を呈する。

第Ⅻ層は褐色火山灰層(ローム)で高館火山灰層の上部に相当する。上位の八戸火山灰層とは明瞭な境界で接し、上限部の数cm以内はミルクチョコレート色を呈し、炭化した植物の碎片を含む風化帯で、八戸火山灰層堆積直前の地表である。

縄文時代以降の遺物は、一般にⅥ層以上の土層に含まれ、もしⅦ層以下の下位に遺物があるとすれば、それは縄文時代より前の時代のものである。(松山 力)



第3図 発掘区域地形図及びグリッド配置図

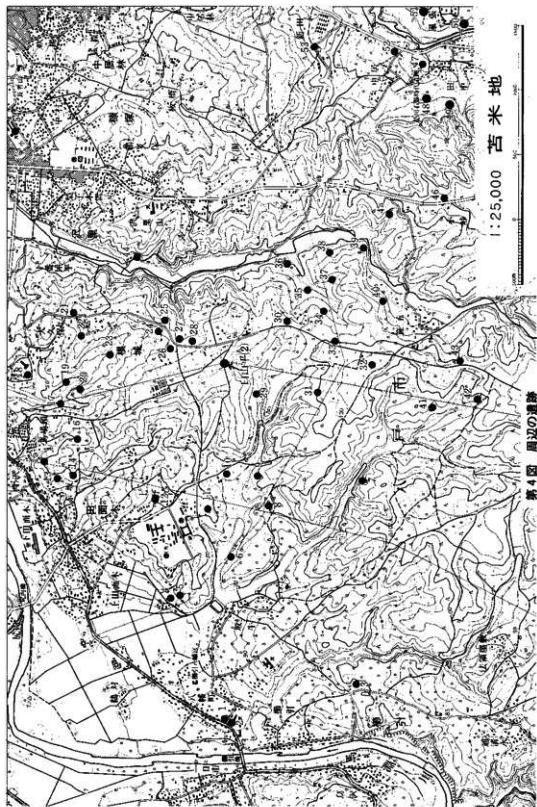
第2節 周辺の遺跡（第4図、第2表）

八戸市には、縄文時代早・前期の長七谷地貝塚をはじめ、同晩期の是川遺跡、古墳～奈良時代の鹿島沢古墳群、中世の根城跡など著名な遺跡が多く、特に、先史時代の遺跡は、戦後の発掘調査による古代文化の究明に大きく貢献している。

また、ほかにも多くの遺跡が分布する。以下、周辺の遺跡を列記した。（昭和53年3月地域振興整備公団刊行の八戸新都市開発整備事業に係る環境調査報告書、同年10月県教育委員会刊行の遺跡地図及び遺跡地名表を参照したものである。）

No.	遺跡名	所在地	時代	No.	遺跡名	所在地	時代
1	千石屋敷遺跡	八戸市八幡字千石屋敷	晩	28	滝浅屋新田遺跡(2)	八戸市浅里字滝浅屋新田	前史
2	八幡貝塚	八戸市八幡字館ノ下	晩	29	長者森遺跡	八戸市田面木字長者森	早・中 後・晩・赤
3	御引遺跡	八戸市御引字岡前	城跡	30	丹後平遺跡(1)	八戸市根城字丹後平	後
4	上野平遺跡(1)	八戸市田面木字上野平	後・晩	31	田面木平遺跡(1)	八戸市田面木字田面木平	後史
5	上野平遺跡(2)	八戸市田面木字上野平	歴史	32	田面木平遺跡(2)	八戸市田面木字田面木平	歴史
6	宮提沢遺跡(1)	八戸市田面木字宮提沢	後・晩	33	丹後平遺跡(3)	八戸市根城字丹後平	後史
7	笹の沢遺跡	八戸市坂牛字笹の沢頭	後	34	丹後平遺跡(2)	八戸市根城字丹後平	後史
8	宮提沢遺跡(2)	八戸市田面木字宮定沢	後	35	丹後谷地遺跡(2)	八戸市根城字丹後谷地	後史
9	宮提沢遺跡(3)	八戸市田面木字宮定沢	後	36	丹後谷地遺跡(1)	八戸市根城字丹後谷地	前・中 後史
10	宮提沢遺跡(4)	八戸市田面木字宮定沢	中 後史	37	丹後谷地遺跡(4)	八戸市根城字丹後谷地	後史
11	酒美平遺跡	八戸市田面木字酒美平	中 後史	38	丹後谷地遺跡(3)	八戸市根城字丹後谷地	後史
12	田面水遺跡	八戸市田面木字外久保15	中 後史	39	丹後谷地遺跡(5)	八戸市根城字丹後谷地	後史
13	田面木赤坂遺跡(1)	八戸市田面木字赤坂	後史	40	笹子遺跡(1)	八戸市根城字笹子	後史
14	田面木赤坂遺跡(2)	八戸市田面木字赤坂	後史	41	鳥ノ木沢遺跡	八戸市田面木字鳥ノ木沢	後
15	田面木赤坂遺跡(3)	八戸市田面木字赤坂	後史	42	葦窪遺跡	八戸市田面木字葦窪	後
16	藤窪遺跡	八戸市田面木字鶴程	早・後 赤・後史	43	笹子遺跡(2)	八戸市根城字笹子	後史
17	内沢遺跡	八戸市根城字内沢	後	44	鍋久保遺跡	八戸市足川字鍋久保	後
18	大久保遺跡(1)	八戸市根城7-14	後 後史	45	小峠遺跡	八戸市足川字小峠	後・晩
19	牛ヶ沢遺跡(1)	八戸市根城字牛ヶ沢	中 後史	46	小峠・里塚	八戸市足川字小峠	一里塚
20	牛ヶ沢遺跡(2)	八戸市根城字牛ヶ沢	後	47	中居遺跡	八戸市足川字中居	早・晩
21	鹿島沢古墳	八戸市根城字鹿島沢34-35	歴史	48	一王子遺跡(1)	八戸市足川字一王子	前・中
22	大久保遺跡(2)	八戸市根城字大久保	後史	49	一王子遺跡(2)	八戸市足川字一王子	前・中
23	牛ヶ窪遺跡(1)	八戸市根城字牛ヶ窪	後史	50	風張遺跡	八戸市足川字館ノ内	後 後史
24	牛ヶ窪遺跡(2)	八戸市根城字牛ヶ窪	中	51	風張遺跡(1)	八戸市足川字館荷上	後 後史
25	古宮遺跡	八戸市足里字古宮	歴史	52	堀田遺跡	八戸市是川字堀田	中・後 晩
26	白山平遺跡(1)	八戸市根城字白山平	歴史	53	新田遺跡	八戸市是川字新田	中
27	滝浅屋新田遺跡(1)	八戸市浅里字滝浅屋新田	前史	54	榎塚遺跡	八戸市榎塚字南榎塚33	後

第2表 周辺の遺跡一覧表



第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

(グリッド設定)

日本道路公団設置の路線中心杭のうち、STA411+20とSTA412+00の二本を選び、この杭を結ぶ直線（南北線）とこれに直交する直線（東西線）を基準線として座標を組んだ。

南北の基準線は、南から北へ向かって算用数字を付し、東西の基準線は、東から西へ向かってアルファベットを付した。この2本の基準線を基に、4m四方を1単位としてグリッドを設定した。

各グリッドの呼称は、参考図のように、東西方向のアルファベットと南北方向の算用数字の両者の組み合わせで表現した。

(地区分割)

発掘調査総面積が19,000㎡と広大で、調査区域がほぼ南北方向に細長い範囲であることから、調査区域を、区域内に所在する2本の農道を目安に南から北へA・B・Cと記号を付けて便宜上地区分割を行った。

(粗掘り)

遺跡の性格や遺構・遺物の分布状況を把握するため、市松状に掘り進めていくこととし、A地区から開始することにした。

(土層の観察)

調査区域内の基本的な土層を把握するため、区域内に数か所土層観察用のテストピットを掘った。土層の観察については、調査担当者の共通理解と統一を図るために随時協議を行うことにした。

土層の表記は、自然堆積土にローマ数字、遺構内堆積土に算用数字をそれぞれ上位の層から下層へ順に付していくことにした。(参考図参照)

(遺物の取り上げ)

遺構外出土遺物は、原則としてグリッド一括で取り上げることにし、必要に応じて微細図を作成することにした。

遺構内出土遺物は、出土地点の層位とレベルを計測し、次いで平面図を作成し、写真撮影の後、遺物台帳に記載しながら取り上げることにした。

出土遺物は、遺構内、遺構外ともに種類に応じて遺物カードの色を区別して取り上げることにした。

(遺構の精査)

遺構には、検出順・形態別に算用数字を付した。

遺構の精査は、原則として4分法によることにしたが、遺構の規模などにより2分法も採用した。

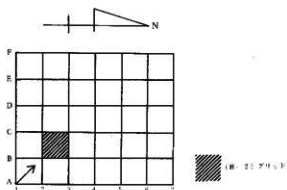
遺構の実測は、簡易遣り方測量で行うことにし、縮尺は、原則として1/20で作図することにした。

(写真撮影)

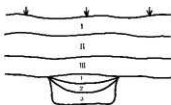
35ミリと50ミリのカメラ2台を使用し、フィルムは、モノクロとカラーリバーサルに2種類で撮影することにした。

遺構については、確認状況、遺構内土層断面、完掘状況を中心として撮影し、遺物については、出土状況を中心として撮影することにした。遺跡の遠景や調査状況等は、随時撮影することにした。

参考図 1



参考図 2



第2節 調査の経過

〈昭和56年度（第1次調査）〉

調査に先立ち、4月21日縦貫道関係5遺跡について調査関係者の合同打ち合せ会議が開催された。

翌22日に器材運搬、23日からは、環境整備や草刈り作業を行い、終了後、早々にグリッドを設定し、A地区から粗掘り作業を開始した。

5月下旬には、粗掘り作業もA地区の約1/2まで進んだが、この時点では、遺構は全く検出されず、出土遺物も少量であった。

6月下旬に調査の主力をA地区からB地区へと移行し、1か月以上粗掘り作業を継続したが、

A地区同様、遺構は検出されず、出土遺物を少量であった。

粗掘り作業もB地区中央部から北側へ移り、ようやくB地区(O-22)グリッド第Ⅱ層から縄文時代後期初頭の完形壺形土器が一個出土した。この地点の付近を更に詳細に精査したが、その他の遺物・遺構は確認されなかった。

9月に入り、B地区中央付近から北側にかけて一帯で、溝状ピット3基と円形ピット1基が検出された。

下旬には、粗掘り作業・精査もC地区へ進んだ。

10月上旬、A・B両地区の調査が終了したが、検出された遺構は4基、出土遺物は、ダンボール箱で約4箱であった。

10月末、C地区の調査が終了したが、この地区も出土遺物は少量であり、遺構は検出されなかった。

本遺跡は、昭和57年度にも発掘調査は予定されており、その対象区域はC地区の北側延長部分である。このため、C地区北側のグリッド杭を再点検し、来年度分との境に境界杭を打ち込んだ。

10月31日、昭和56年度の調査を終了した。

<昭和57年度(第2次調査)>

4月初旬より準備にかかり、4月20日から発掘作業を開始した。また、東北縦貫自動車道八戸線建設予定路線内遺跡の発掘調査について調査関係者による合同会議が開催された。

グリッドの設定については、第1次調査時の杭を利用できるところはそのまま利用した。また、層序についても昨年の土層観察用テストピットを利用し、更に土捨場も1次調査完了区域内に確保できた。粗掘りは市松状に南側から始めたが、全体的な見通しを立てながら進めるようにした。これと並行して、土層観察用のベルトを残し、土層の堆積状態を確かめながら掘下げた。セクション実測は、4月下旬から遺構実測に合せながら行った。

溝状ピットの多くが第Ⅲ層で、また、溝及びその他の遺構は表土直下面で確認された。ほかに、表土を排除した段階で、周囲と色調が異なる部分もいくつかみられたが、1段掘下げると消えるものが多かった。

溝状ピットや土壌の精査及び実測は、5月中旬から6月初旬でほぼ終了した。80～88ラインとQ～Wラインに画された区域は、農道等の事情から6月に入ってから第Ⅲ層の排土を行ったが、路線外との境界付近で第8号溝状ピットを確認した。ほぼ層位ごとに掘下げたのであるがこのピットは、第Ⅲ層直上では全く痕跡がみられなかったものである。

遺物は、大半が表土中から出土し、遺構内から出土したものはなかった。

第8号溝状ピットの精査も終え、6月15日、調査を終了した。

(成田)

第4章 検出遺構と出土遺物

第1節 遺構

(1) 溝状ピット

第1号溝状ピット (第6図、第2図版)

〔位置と確認〕 O-44グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸が167cm、短軸が広いところで38cm、狭いところで20cmの不整の溝状を呈する。壙底部では、長軸158cm、短軸8cmで、深さは、最深部で23cm、浅い部分で15cmである。

〔壁・底面〕 長軸方向の断面は、一方が垂直に立ち上がり、他方が緩やかな曲線状の立ちあがりを示しており、全体的には、他の溝状ピットと比較して粗雑な作りである。底面は凹凸が多い。

〔覆土〕 遺構の深さが平均18cmであり、1層だけの覆土である。

〔出土遺物〕 出土しなかった。



第6図 第1号溝状ピット

第2号溝状ピット（第7図、第2図版）

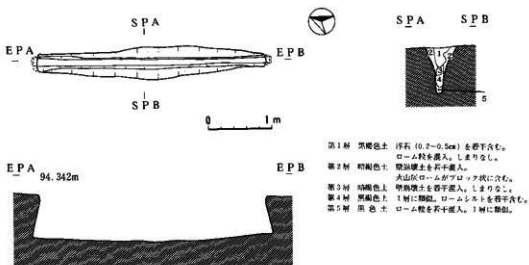
〔位置と確認〕 S-46・T-46グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸362cm、短軸50cmで、中央が若干膨らむ葉巻状を示す。壇底部では、長軸380cm、短軸10cmで細長い溝状を示し、深さは平均70cmである。

〔壁・底面〕 長軸方向の断面は、両端が上部から下部に向かって若干えぐられた形状であり、また、短軸方向の断面は、壇底部から中位まで垂直に立ち上がり、中位から開口部にかけてはラッパ状に開く。底面は、中央部が両端部分より若干低くなっている。

〔覆土〕 自然堆積の様相を示し、5層の区分できた。第2層は壁の崩壊土と思われる。

〔出土遺物〕 出土しなかった。



第7図 第2号溝状ピット

第3号溝状ピット（第8図、第2図版）

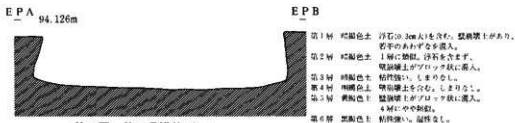
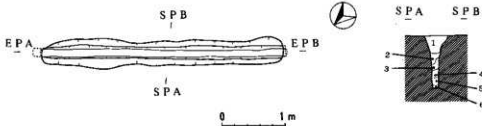
〔位置と確認〕 P-55・Q-55・P-56グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸385cm、短軸40cmで、中央部が若干膨らむ葉巻状を示す。壇底部では、長軸405cm、短軸13cmで、細長い溝状を示し、深さは、平均85cmである。

〔壁・底面〕 長軸方向の断面は、両端の壁が開口部から底部にかけて若干内湾しており、また、短軸方向の断面は、壇底部から中位にかけて垂直に立ち上がり、中位から開口部にかけてはラッパ状に開く。底面は、中央部が両端部分より若干高くなっている。

〔覆土〕 事前堆積の様相を示し、6層に区分できた。第1層の大半は壁の崩壊土と思われる。

〔出土遺物〕 出土しなかった。



第8図 第3号溝状ピット

第4号溝状ピット（第9図、第2図版）

〔位置と確認〕 L-80・L-79グリッドに位置し、第III層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸362cm、短軸85cmで、やや幅が広く、深さは、最深部で155cmで、浅い部分で138cmである。また、幅は、開口部から徐々に狭くなっているが、深さ約130cmの中位部分から更に狭まり、底部では、ほぼ12～15cmになっている。長軸方向の断面は、開口部から徐々に狭まり、底部では、322cmである。

〔壁・底面〕 壁は、第III層～第V層直上部分はもろいが、第V層以下は、かたくしっかりしている。底面には起伏がある。

〔覆土〕 自然堆積の様相を示し、5層に区分できた。第3層下部に南部浮石粒が混じった褐色ブロックが混入しているが、これは、壁の崩落土とみられるものである。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

第5号溝状ピット（第10図、第2図版）

〔位置と確認〕 K-74グリッドに位置するが、この地点は、土層観察のため第V層上部まで掘下げた場所である。

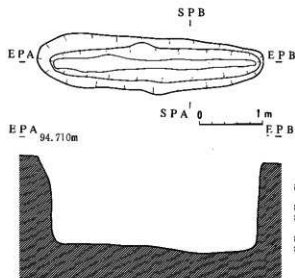
〔平面形・規模〕 遺構確認が第V層上部であったため、本遺構の平面形・規模等は下半部分のものである。

確認面での上端は、長軸が294cm、短軸が50cmであり、下端は、長軸が294cm、短軸が20cmである。長軸方向の断面は、南西側コーナーが内傾し、北東側コーナーがほぼ垂直に立ち上がる。また、短軸方向の断面は、底部から開口部へ向けて外傾する形状である。

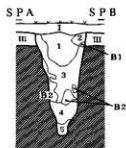
〔底面〕 多少起伏があり、南西側が深く、北東側が浅い。

〔覆土〕 自然堆積の様相を示し、5層に区分できた。第1層には、中振浮石粒と南部浮石粒が若干混入し、第2層には、南部浮石粒がまばらに混入している。

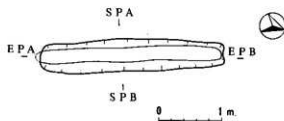
〔出土遺物〕 出土しなかった。



第9図 第4号溝状ピット



- 第1層 黒褐色土(10Y R 7)粘性、しまりあり、南部浮石粒(0.3~0.5cm)をまばらに混入、草木腐あり、浮石を全体に混入。
- 第2層 黒褐色土(10Y R 7)粘性、しまりあり、浮石を全体に混入。
- 第3層 黒褐色土(10Y R 7)浮石(0.2~0.5cm)を全体に混入、草木腐あり粘性あり、しまり強い。
- 第4層 におい黄色(10Y R 6)砂質を多量に含む、粘性、しまりなし。
- 第5層 黒褐色土(7.5Y R 6)砂質を多量に含む、粘性、しまりなし。
- B1 暗褐色土(10Y R 7)浮石を全体に混入、草木腐あり、粘性あり、しまり強い。
- B2 褐色土(10Y R 6)南部浮石粒(0.2~0.5cm)を少量混入、粘性、しまりあり。



EPA 94.000m

EPB

- 第1層 黒褐色土(10Y R 7)浮石(0.3~0.5cm)を若干混入、粘性強い、しまりあり、腐性中あり。
- 第2層 暗褐色土(10Y R 7)浮石(0.2~0.3cm)を少量混入、粘性、しまり強い。
- 第3層 暗褐色土(10Y R 7)黒褐色土を全体に含む、粘性、しまり強い。
- 第4層 灰土(八戸赤山(灰)埋積)
- 第5層 黒褐色土(10Y R 6)全体に砂粒を混入、しまり、粘性若干強い。

第10図 第5号溝状ピット

第6号溝状ピット（第11図、第3図版）

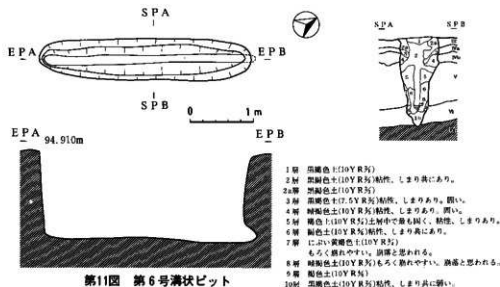
〔位置と確認〕 S-77・T-77グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸338cm、短軸64cmで、両端部が丸みを帯びた溝状を呈する。坑底部では、長軸336cm、短軸12cmで、細長い溝状を示し、深さは、最深部分で148cm、浅い部分で139cmである。

〔壁・底面〕 長軸方向の断面は坑底部の両端がほぼ垂直に立ち上がるが、北東側の底部だけが膨らんでいる。また、短軸方向の断面は上位、中位、下位と3段になっており、幅は下部になるほど狭い。底面は、北東側と南西側が凹み中央が高くなっている。

〔覆土〕 10層に区分できた。第2層は、中散浮石粒が全体的に混入し、南部浮石粒が部分的に混入する黒褐色土層であるが第5層、第6層が自然堆積した後、人為的に形成されたものとみられる。

〔出土遺物〕 出土しなかった。



第7号溝状ピット（第12図、第2図版）

〔位置と確認〕 T-67グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認した。

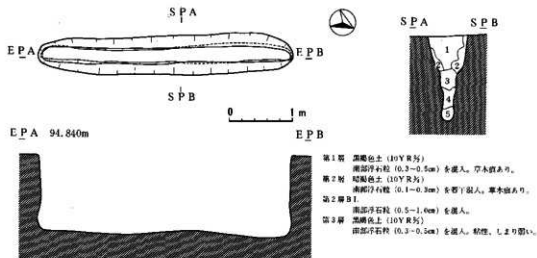
〔平面形・規模〕 開口部では、長軸406cm、短軸64cmで、両端が丸みを帯びた溝状を呈する。坑底部では、長軸400cm、短軸18～30cmで、やや蛇行ぎみの溝状を示し、深さは、最深部分で132cm、大半の部分は120～127cmである。

〔壁・底面〕 長軸方向の断面は、開口部から垂直に近い傾斜を示し、底部で膨らむ形状であ

る。また、短軸方向の断面は、上位、下位の2段になっており、開口部から60cmぐらいまでは緩い傾斜を示すが、それより下部は急に狭まり、底部でやや膨らむ形状である。底面は、多少起伏がある。

〔覆土〕 自然堆積の様相を示し、5層に区分できた。第1層は、中散浮石粒が全体的に混入し、南部浮石粒が部分的に混入している。第2層は、南部浮石粒が密に混入している部分と、まばらに混入している部分がある。第3層は、中散浮石粒と南部浮石粒が若干混入している。

〔出土遺物〕 出土しなかった。



第12図 第7号溝状ピット

第8号溝状ピット (第13図、第3図版)

〔位置と確認〕 V-83・V-84・W-84グリッドに位置している。中散浮石層(第III層)上面では全く痕跡は認められなかったが、この層を排除した面(第IV層)で落込みが認められたものである。

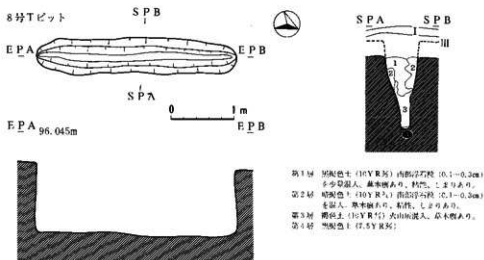
〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 開口部では、長軸317cm、短軸54cmで、両端が丸みを帯びた溝状を呈する。坑底部では、長軸306cmで、短軸54cmで、やや蛇行ぎみの細長い溝状を示し、深さは、南西側が110cm、北東側が116cmである。

〔壁・底面〕 長軸方向の断面は、開口部から底部付近までは内傾するが、底部近くで丸みを帯び坑底に達する。また、短軸方向の断面は、開口部から70cmぐらい下部までは緩く傾斜するが、以下は急に狭くなり、垂直に近い傾斜を示す。底面は、南西側が浅く、北東側が深い。

〔覆土〕 自然堆積の様相を示し、4層に区分できた。第1層は、中振浮石粒が多量に含まれ、上部では第3層との区別がつけ難いが、かたさによって区分したものである。

〔出土遺物〕 出土しなかった。



第13図 第8号溝状ビット

(2) 土 壌

第1号土壌(第14図、第4図版)

〔遺構の位置と確認〕 U-53・U-54グリッドに位置し、第III層上部で黒褐色の円形の落ち込みを確認した。

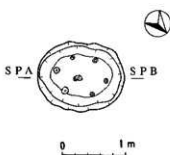
〔平面形・規模〕 平面は、楕円形で、開口部が底部より若干広がっている。

底面にほぼ平坦でしりがあり、中央に1個、壁際に6個の小ビットを検出した。このビットは、直径10cm前後で、深さが40cm前後の先細の形状であり、細い杭を打ちこんだ痕跡ではないかと思われる。壁は、底面から開口部に向かって緩やかに立ち上がるが、多数の凹凸がみられる。

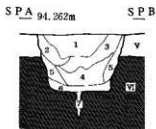
開口部では、長軸が140cm、短軸が110cmである。底面では、長軸が95cm、短軸が65cmで、深さは90cmである。

〔覆土〕 自然堆積の様相を示し、底部の小ビット内覆土を除いて、6層に区分できた。第2・3・4・5層は、いずれも壁の崩壊土が混入しており、特に、第5層はそれが顕著である。小ビット内覆土は、いずれも暗褐色土であり、第6層の土質に近似している。

〔出土遺物〕 出土しなかった。



第14図 第1号土坑



- 第1層 黒色土 浮石(0.1-0.5cm)を多数に含む。しまりなし。
 第2層 黒褐色土 浮石(0.1-0.5cm)を少量に含む。壁状粘土がブロック状に混入。
 第3層 黒褐色土 浮石(0.1-0.3cm)を含む。上部層に黒褐色土がブロック状に見られる。しまりなし。
 第4層 黒褐色土 浮石(0.1-0.3cm)を若干含む。しまりなし。
 第5層 暗褐色土 壁状粘土を多数に含む。シルト質でしまりなし。
 第6層 赤色土 壁状粘土を若干含む。シルト質でしまりなし。

第2号土坑 (第15図、第4図版)

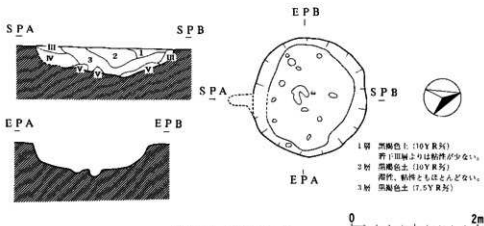
〔位置と確認〕 L-80、L-81グリッドで検出され、表土を排除した段階で、黒褐色の円形落ち込みを確認した。

〔形態〕 平面は、ほぼ円形で、断面は皿状である。底面には、多数の浅い小ピットが検出、凹凸が多い。

〔規模〕 開口部では、長軸が185cm、短軸が183cmである。底面では、長軸が156cm、短軸が132cmである。深さは、42cmである。

〔覆土〕 3層の区分でき、それぞれに中散浮石粒が混入している。

〔出土遺物〕 出土しなかった。



第15図 第2号土坑

- 1層 黒褐色土 (10V黄判)
 若干田層よりは粘性が少ない。
 2層 黒褐色土 (10V黄判)
 層状、粘質ともほとんどない。
 3層 黒褐色土 (7.5V黄判)

第3号土坑（第16図、第4図版）

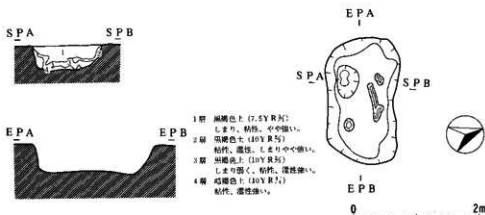
〔位置と確認〕 R-79グリッドで検出され、第Ⅲ層上部で黒褐色の楕円形落ち込みを確認した。

〔形態〕 平面は、楕円形を呈している。底面はやや平坦で、浅いピットが検出された。

〔規模〕 開口部は、長軸が202cm、短軸が110cmである。底面は、長軸が152cm、短軸が76cmである。深さは48cmである。

〔覆土〕 4層に区分できたが、第1・2層は中散浮石・南部浮石が粒状に混入し、第3・4層は南部浮石が粒状（3～5mm）に混入している。

〔出土遺物〕 出土しなかった。



第16図 第3号土坑

第4号土坑（第17図、第4図版）

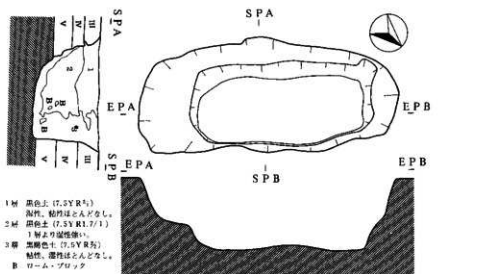
〔位置と確認〕 K-84グリッドで検出され、表土を排除した段階で黒褐色の落ち込みを確認した。

〔形態〕 平面は、楕円形を呈し、断面は不整形な形状である。底部に段があり、底面は凹凸が多い。

〔規模〕 開口部では、長軸が410cm、短軸が106cmである。底面では、長軸が265cm、短軸が68cmで、深さは118cmである。

〔覆土〕 3層に区分できたが第1～第2層が黒色腐食土層で、第3層は中散浮石粒の流入層である。

〔出土遺物〕 出土しなかった。



第17図 第4号土城

(3) 建物跡 (第18図、第4図版)

〔位置と確認〕 U-68・U-69グリッドから検出されたが、遺構の南西部分は路線外のため不明で、第II層排土後確認した。

〔重複〕 南端部分は、北東側から路線外にかけて構築された溝によって切られている。

〔形態〕 南西部分が路線外のため明確な形状は不明であるが、検出された部分から推定すると、長方形プラントと思われる。底面は、平坦である。

〔規模〕 開口部では、検出した部分に長辺が248cm、短辺が220cmである。底部では、検出部分の長辺が224cm、短辺が194cmである。

〔柱穴〕 壁下にほぼ円形のピットが8個検出された。隅の柱穴は、径が約25cm、深さが20～30cmでそのほかの柱穴は径が15～20cm、深さが7～8cmである。

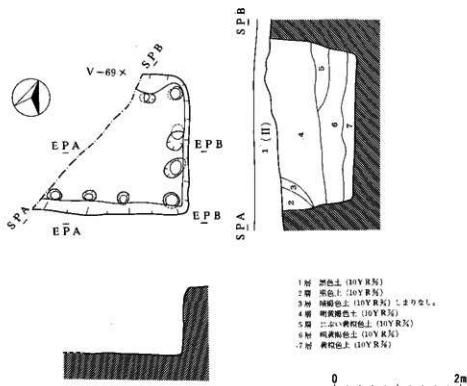
〔覆土〕 4層に区分できたが、第IV層・第V層・第VI層等のロームブロックが多量に含まれ、埋戻しされた層序を示している。

(4) 溝・環状溝 (第19図・20図、第4図版)

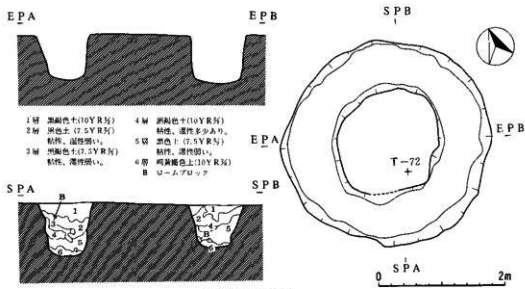
溝は、P-72グリッドから南西方向に一条検出され、第II層で確認された。幅は90～120cm、深さは30～60cmである。覆土は、第I層とほとんど区分し難い。U-68グリッドで建物跡を切っており、その南西側は路線外へ延びている。

環状溝は、S-71・S-72・T-71・T-72グリッドから検出され、第III層直上で確認され

た。溝の幅は、開口部が84～90cm、底面が50～70cmで、環の径は約230cmである、中央部は、径が160cmのマウンド状を示しているが、特別な施設はない。覆土は、第1～第5層までは、中振浮石粒・南部浮石粒を若干含む黒色腐食土で、第6層は、第V層のロームブロックが多量に混入した層である。出土遺物はなく、用途も不明である。

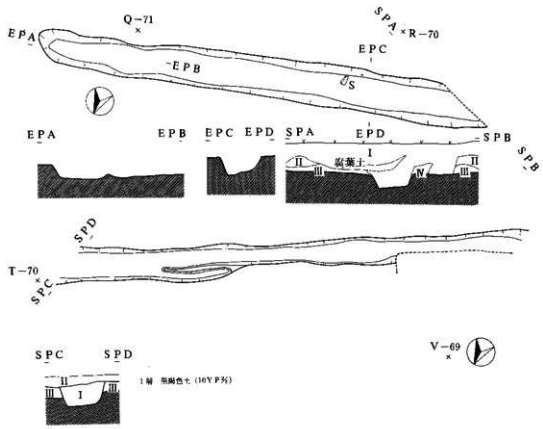


第18図 建物跡



- | | |
|------------------|------------------|
| 1層 黒褐色土(10YR5/) | 4層 黒褐色土(10YR5/) |
| 2層 黒色土(7.5YR5/) | 5層 黒色土(7.5YR5/) |
| 粘性、湿性強い。 | 粘性、湿性多少あり。 |
| 3層 黒褐色土(7.5YR5/) | 6層 暗黄褐色土(10YR5/) |
| 粘性、湿性強い。 | ロームアムック |

第19図 環状溝



第20図 溝跡

第2節 遺物

1次・2次調査の結果、縄文時代・奈良・平安時代、近世以降にわたる遺物が出土したが、量は極めて少ない。主に、第Ⅰ層～第Ⅱ層より混然と出土したため、層位的に把握することはできなかった。以下、土器、石器、その他に分類して記述する。

1. 土器

縄文時代早・中・後・晩期の土器、土師器が出土した。完形で出土したのは一例で、他はすべて破片であり、復原できるものはない。帰属する年代により次のように分類される。

(1) 第Ⅰ群土器 (第21図-1～3、第5図版-1～3)

表裏面とも縄文を施文し、胎土に繊維を含まない土器で、縄文時代早期の赤御堂式に比例される。細片のため器形は知り得ないが、胴部から尖底部にかけての破片と思われる。胎土には細砂粒が多く含まれ、焼成は良好で、色調は赤褐色である。器厚は6mm～8mmである。施文原体はR往を使用している。

(2) 第Ⅱ群土器 (第21図-4～12、第22図、第23図-13～28、第5図版-4～19、第6図版-20～28、32)

縄文時代中期末～後期初頭の土器を一括した。施文文様による次のように分類される。

a類 (第21図-4～12、第5図版-4～12) 地面縄文に沈線文を施す土器で、川代遺跡出土土器、蛭沢遺跡第Ⅰ群土器の中に類例の求められるものである。破片のため全体の器形は不明であるが、大きな波状口縁をもつ大型の深鉢で、折り返し口縁の土器と思われる。縄文を施文した後、沈線で曲線文様を描いている。

b類 (第22図、第6図版-32) 無文地の沈線文を施す土器で、十腰内Ⅰ式に比例される。本遺跡から出土した唯一の完形土器である。器形は壺形で、胴部に沈線による渦巻文様を描くものである。

c類 (第23図-13～22、第5図版-13～19、第6図版-20・21) 燃糸文を施す土器を一括した。折り返し口縁のもの、折り返し口縁でないものがあり、前者には縦走燃糸文、後者には格子目状燃糸文が施文されている。どの形式に属するものかは不明であるが、折り返し口縁を有する点から、これらの土器はa類に近似するものといえる。

d類 (第23図-23～28、第6図版-22～28) 上記の施文以外の土器を一括した。

(3) 第Ⅲ群土器 (第23図-30～32、第6図版-29～31)

縄文時代後期後葉から晩期にかけての土器と思われるが、細片のため型式は不明である。ま

た、底部に木葉痕のある土師器が1片(第22図-32、第6図版-31)出土している。(岡田)

2. 石 器

1次・2次合せて27点で、すべてI層・II層から出土した。器種により次のように分類される。

(1) 石 鏃 (第24図-1~13、第25図-14~22、第7図版-1~21)

総数21点出土した。そのうち、定形のもが8点である。基部の形態により、次のように細分される。

(a) 無茎尖基のもの(第24図-1-8、第7図版-1~8)

8点出土した。鏃先を欠損するもの5点、基部を欠損するもの2点、鏃先・基部とも欠損するものが1点である。他の石鏃に比べてやや薄型で、腹面に主要剥離面を残すものがある。

(b) 無茎平基のもの(第24図-9~13、第7図版-9~13)

5点出土した。鏃先を欠損するもの3点、基部を欠損するものが2点ある。他の石鏃に比べて肉厚なものが多い。

(c) 無茎凹基のもの(第25図-14・15、第7図版-14・15)

2点出土した。2点とも完形品で、(a)と同様薄手である。腹面に主要剥離面を残すものもある。

(d) 有茎T基のもの(第25図-16~20、第7図版-16~19)

5点出土した。このうち鏃先のみを欠損するもの4点、基部のみを欠損するもの2点、鏃先・基部とも欠損するものが3点ある。

(e) その他(第25図-21・22、第7図版-20・21)

鏃先・基部とも欠損し、分類できないものが2点ある。

(2) 石 匙 (第25図-23、第7図版-22)

1点出土した。縦長の剥片を用いた片面加工のもので、腹面の右側縁に調整剥離が加えられ、刃部を作出するものである。

(3) 石 鏡 (第25図-24、第7図版-23)

1点出土した。縦長の剥片を素材とし、打面の反対側に刃部を作出するものである。打痕は除去されている。両面とも、刃部のみに調整剥離が加えられているが、使用のため刃部の磨耗が激しい。また、側縁上部には磨滅痕があり、これは、この石鏡を器具に固定して使用した際の痕跡と思われる。

(4) 磨製石斧 (第26図-25・26、第7図版-24・25)

2点出土した。刃部と基部の破片である。刃部破片は扁平な石斧の円刃で、その形態から縦

斧として使用されたと考えられる。使用の際の刃こぼれが観察される。

(5) 敲石 (第26図-27、第7図版-26)

1点出土した。磯の陵の一部に敲打痕が認められるものである。

3. 古銭 (第26図-28~34、第7図版-33~37)

寛永通宝が7点出土し、中に背元をもつものが1点ある (第26図-34、第7図版-37)。

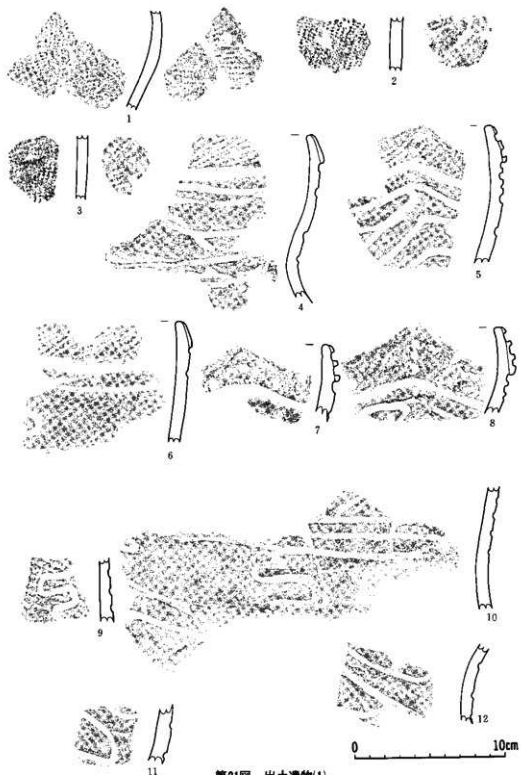
(岡田)

番号	出土地区・層位	形状・群類	外面施文	出土	分類	備考
1	O-21・II	銅 部	L.R施文 (縦位同軸)	貝・小鎌倉	I	内面L.R施文
2	〃・II	〃	〃	〃	〃	〃
3	〃・II	〃	〃	〃	〃	〃
4	O-15・II	銅 部	比喩・L.R施文 (縦位同軸)	貝	II	折り返し二條
5	O-16・II	〃	〃	〃	〃	〃
6	O-14・II	〃	〃	〃	〃	〃
7	〃・II	〃	〃	〃	〃	〃
8	〃・II	〃	〃	〃	〃	〃
9	O-15・II	銅 部	L.R施文 (縦位同軸)	〃	〃	〃
10	C-15・II	〃	〃	〃	〃	〃
11	Z-15・II	〃	〃	〃	〃	〃
12	B-14・II	〃	〃	〃	〃	〃
13	D-4・II	L1 銅 部	L施全体	〃	〃	〃
14	D-3・II	〃	〃	〃	〃	〃
15	F-10・II	〃	L施全体 (網目状)	〃	〃	〃
16	E-9・II	〃	L施全体 (網目状)	〃	〃	〃
17	D-2・II	銅 部	L施全体	〃	〃	〃
18	D-3・II	〃	L施全体 (網目状)	〃	〃	〃
19	H-10・II	〃	L施全体 (網目状)	〃	〃	〃
20	H-10・II	〃	L施全体 (網目状)	〃	〃	〃
21	L-37・II	〃	L施全体 (網目状)	〃	〃	〃
22	H-10・II	〃	L施全体 (網目状)	〃	〃	〃
23	表 採	銅 部	R.L.R施文縦位同軸	〃	〃	内面研削
24	〃	〃	R (無印)	〃	〃	〃
25	〃	銅 部	L.R施文 (縦位同軸)	〃	〃	〃
26	D-50・II	〃	R.L.R施文 (縦位同軸)	〃	〃	〃
27	O-13・II	〃	L.R施文 (縦位同軸)	〃	〃	〃
28	表 採	〃	〃	〃	〃	〃
29	L-21・II	〃	〃	〃	〃	〃
30	表 採	〃	L.R施文 (縦位同軸)	〃	III	〃
31	〃	台 (?)	L.R施文 (〃)	〃	〃	〃
32	〃	銅 部	〃	〃	〃	本島直

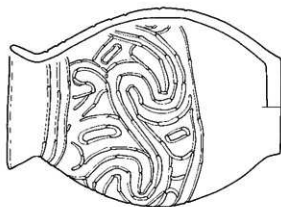
第3表 土器観察表

圖 號	形 體	測土形式 測位	長 ϕ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 ϕ (g)	百 分 標	備 考
第 四—1	石 片	X 12 • II	(72)	16	5	14.30	百 分 標	片先尖部
2	"	O—16 • II	34	14	3	1.5	百 分 標	
3	"	M 71 • I	47	17	4	1.7	"	
4	"	F—13 • II	35	14	4	1.5	"	
5	"	L 10 • II	(32)	11	8	0.8	"	片先尖部
6	"	G—7 • II	(26)	12	4	0.65	"	"
7	"	Q—46 • II	(28)	15	4	0.45	"	"
8	"	C 12 • II	(21)	17	5	1.50	"	片先、基部尖部
9	"	Z—14 • II	46	20	6	5.11	"	
10	"	Y 44 • II	40	17	4	3.11	"	
11	"	R—22 • II	(33)	13	3	1.50	"	片先尖部
12	"	L 49 • II	21	14	3	1.2	"	
13	"	M—34 • II	(34)	(27)	(4)	(4.3)	"	基部尖部
14	"	V 35 • II	35	16	5.5	2.6	"	
15	"	Q—46 • II	29	18	3	1.0	"	
16	"	V 81 • II (1.6)	15	4	1.2	"	"	基部尖部
17	"	R—12 • II (18)	11	4	0.41	"	"	片先尖部
18	"	O 49 • II (20)	17	3	0.41	"	"	片先、基部
19	"	N—47 • II (18)	(14)	2	0.31	"	"	片先、基部尖部
20	"	Y—26 • II (12)	17	3	0.61	"	"	
21	"	S 26 • II (12)	(11)	3	0.31	"	"	
22	"	表 採	(10)	(14)	(3)	0.31	"	"
23	磨 製	G—8 • II	70	17	5	7.8	"	
24	石 器	H 15 • III	73	38	16	47.4	"	
25	磨 製 石 器	表 採						右側色層紋石
26	磨 製 石 器	表 採						安 止 釘
27	磨 石	表 採						"

第 4 表 石器計測表



第21图 出土遺物(1)



地区・層位 0-22II層

外面施文 法線文

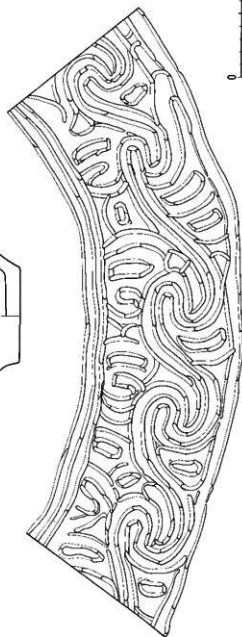
胎色 良好

胎色 褐色

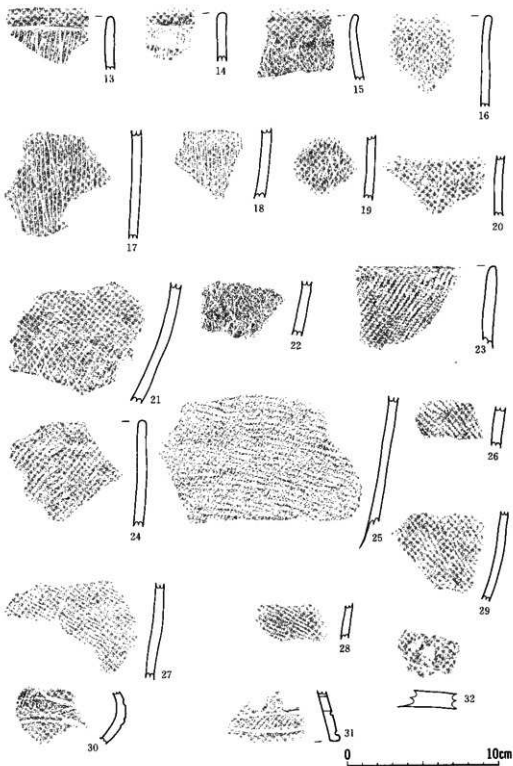
口径 9.8cm

底径 7.5cm

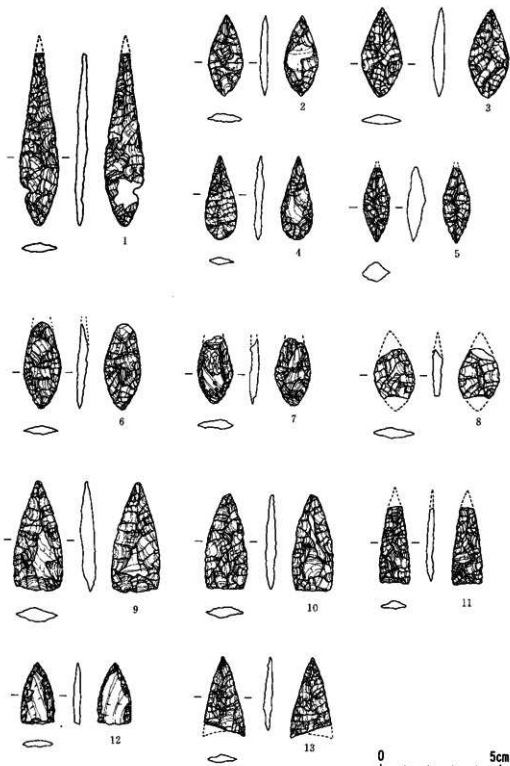
器高 21.4cm



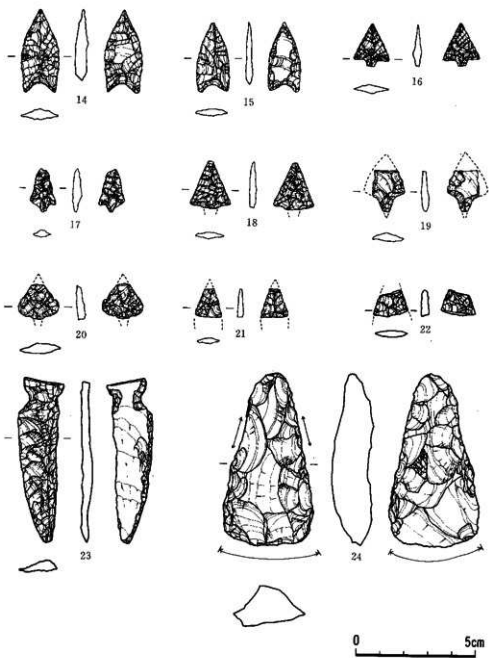
第22図 出土遺物(2)



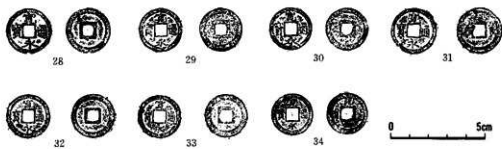
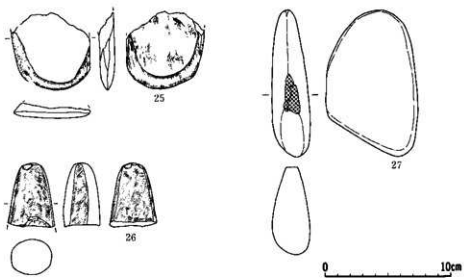
第23图 出土遺物(3)



第24図 出土遺物(4)



第25圖 出土遺物(5)



第26図 出土遺物(6)

第5章 まとめ

本遺跡は、馬淵川とその支流土橋川に挟まれた段丘上に位置し、周辺には鹿島沢古墳群、牛ヶ沢⑬遺跡、長者森遺跡その他多数の遺跡が所在している。発掘区域は、南側に面する斜面から北東側の平坦な場所である。

調査の結果、遺物は、縄文時代早期・中期・後期・晩期の土器、石器、平安時代の土師器などが出土し、遺構では、溝状ピット、土壇などが検出された。遺物の多くは、表土から出土したものであるが、これは、畑耕作等により、中振浮石層から上の遺物包含層が攪乱を受けたためと思われる。また、狩猟に関係すると推定されている溝状ピットが検出されたことは、この地域の特徴を示していると思われる。

溝状ピットは、構築された時期を判定し難い遺構であるが、本遺跡では、1基を除いてほとんどが第Ⅲ層（中振浮石粒多量混入層）を明確に切って構築されている。このことからおそらく縄文時代中期以降の構築と考えられる。

なお、遺物・遺構が密になる部分は、発掘区域内では北西側であり、遺跡の中心部分は、これに続く地域であろう。

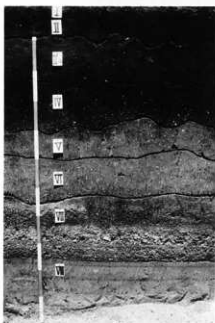
(成田)



1. 発掘区域近景



2. 遺物出土状況

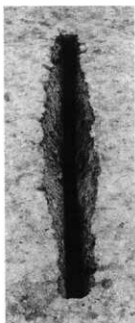


3. 遺跡の層序

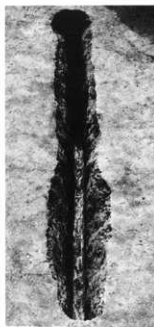
第1図版 発掘区域近景・遺物出土状況・遺跡の層序



第1号



第2号



第3号



第4号

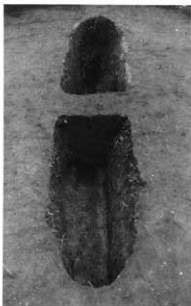


第5号



第7号

第2図版 溝状ピット完掘



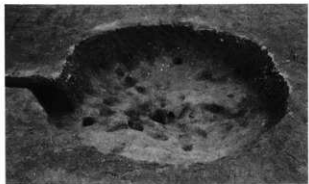
第8号



第6号



第3号土坑



第2号土坑



第4号土坑

第3図版 溝状ピット断面及び土坑



第1号土坑断面



溝



第1号土坑完掘

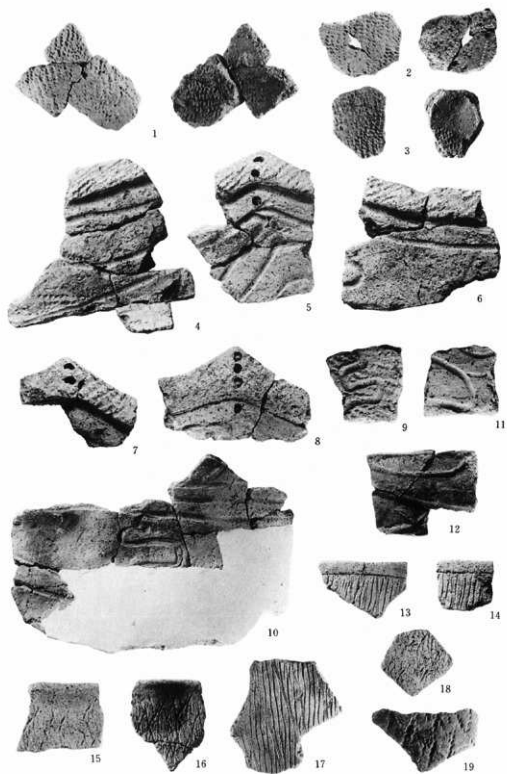


環状溝

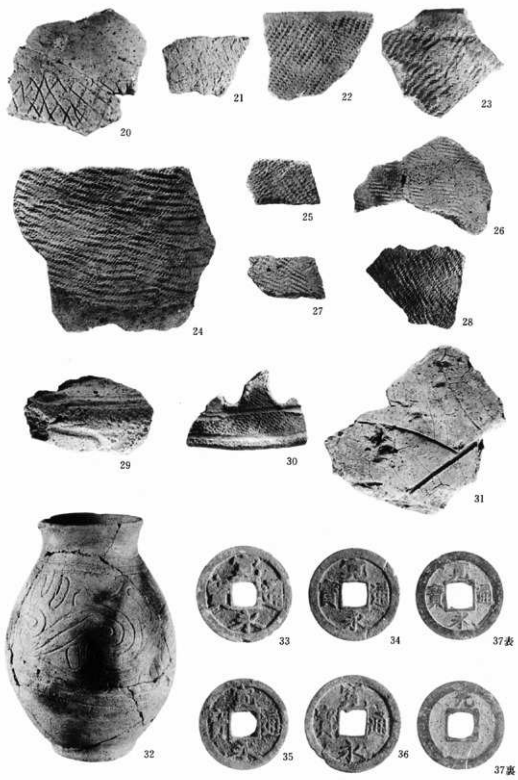
建物跡



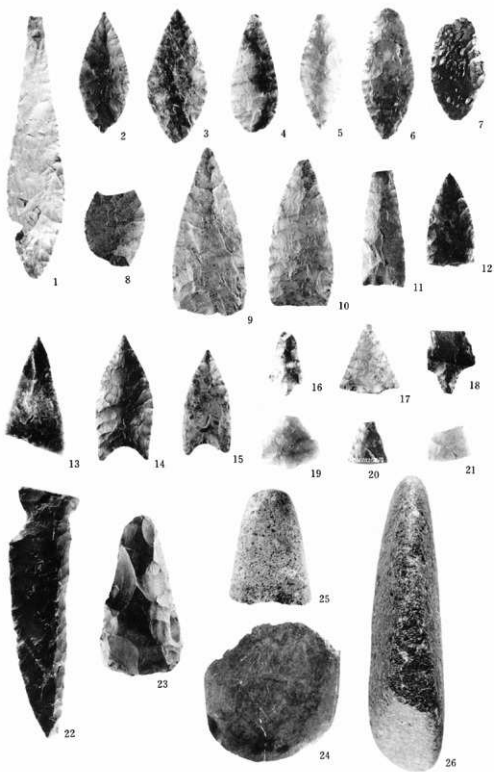
第4図版 土坑・その他の遺構・土器出土状況



第5図版 出土遺物(1)



第6図版 出土遺物(2)



第7図版 出土遺物(3)

青森県埋蔵文化財調査報告書第85集

白山平(2)遺跡
発掘調査報告書

発行日 昭和59年3月31日

編集 青森県埋蔵文化財調査センター
発行 〒030 青森市大字新城字天田内132-15

印刷所 青森オフセット印刷株式会社
〒030 青森市本町2-11-16
